

倉野本『源氏御談義(千鳥抄)』影印と解題

目 次

はじめに『源氏御談義（千鳥抄）』について……………五

倉野本『源氏御談義（千鳥抄）』凡例……………八

第一部 倉野本『源氏御談義』影印篇……………一一

第二部 倉野本『源氏御談義』解題篇……………四七

一 倉野本『源氏御談義』の様相……………四九

- 1 書写上の違い……………四九
- 2 卷名の脱落……………五〇
- 3 書写上の修正……………五〇
- 4 所属卷名の誤り……………五〇
- 5 排列の違い……………五一
- 6 声点と濁音符号……………五二
- 7 「二」の消去……………五二
- 8 「一」の抹消……………五三

9 墨消の傍記……………五三

10 誤写・誤入の問題……………五五

I 項目の並記……………五六

II 証歌・作中歌……………五九

III 『花鳥余情』の混入……………六一

IV 項目の分割……………六二

二 見出し語句……………六四

1 見出し項目……………六四

2 重複項目……………七四

3 河内本……………七五

三 註解の特質……………七六

1 摘録と祖述……………七六

2 関連項目……………七八

3 註解の平易性……………八二

4 独自の註解……………八六

5 『珊瑚秘抄』……………九一

6 『花鳥余情』と倉野本の成立……………一〇二

7 連歌の用語……………一〇九

四 講釈について——講釈聞書年月日……………	一一三
付 『源義辯引抄』所引の『源氏御談義(千鳥抄)』(『至徳記』)……………	一一七

あとがき…………… 一三三

はじめに 『源氏御談義(千鳥抄)』について

『源氏御談義(千鳥抄)』は、その跋文^{〔1〕}によって書名・内容・成立・著者等がほぼ明らかである。すなわち四辻善成が『源氏物語』の「講読の席」を開き、至徳三年(一三八六)の秋から嘉慶二年(一三八八)の冬まで、「五十四帖の秘儀」を講釈した折、平井相助はその「末座」に連なり、一日も欠かさず聴聞したという。その後不審の節々を尋ねて、「双紙の二帖」に聞書し、自ら「千鳥(抄)」と名付た。以来この「双紙」を三〇余年身から放たぬまま、九一歳になるに及び、今これを「匠作尊閣」に献上して、「高恩」に報いるべく、應永廿六年(一四一九)三月に本「双紙」を書写したと伝えるのである。因みにこの跋文、修辭を凝らした文章となっている。

上述の経緯になる本書は、全巻にわたって講釈の年月日を記し、およそ一三〇〇余語句を取り上げ、簡明な註解を講釈の聞書として記述する。取り上げた見出し項目には一部ながら振り仮名や漢字の傍記、あるいは声点などが施される。一方註解は、善成の『河海抄』に大きく拠りながらも、それにとどまらない独自のものも見られる。

ところで『源氏御談義(千鳥抄)』と言えば、従来その奥書・跋文等から成立論もしくは系統論を論じることが多く、『源氏御談義(千鳥抄)』の内部そのものに立ち入って検討したものは極めて少なかった。編者はこの度、倉野本『源氏御談義』を調査する機会に得たので、改めて本書の註解上の特徴を包括的に究明すべく、その一つ一つについて検討を加えていくことにした。その結果そこから得られた講釈の特質は、一口で言えば本書が実に多種多様な側面を有しているという事実であった。より具体的な様相については本編に委ねることにして、以下にその主な点について略述しておく。

第一に、『御談義』の講釈は、基本的には『河海抄』の註解を摘録や祖述の形で受け継ぎながら、簡潔にして平明に説くことを旨としているということである。例えば漢字表記の読み方や登場人物の人物名に関わる講釈の多さも、そうした

はじめに『源氏御談義(千鳥抄)』について

性格の現れとして理解すべきであろう。

第二に、このことは『御談義』と『河海抄』との志向する方向もしくは方法が全く異なることを意味する。すなわち『河海抄』が、典拠・考証・証歌など掲げ、いわゆる准拠を明らかにするのに対して、『御談義』は、上述のように文意や語義を平易に説くことに主眼をおいているということである。

第三に、『源氏』本文に関する註解中の語句を新たに見出し項目として立項するものがある。従ってこれは『源氏』本文と直接は結び付かないのだが、これらは講釈の中で、本来の註解に関連づけて説かれたものをそのまま聞書したものとされる。本編では「関連項目」としたが、これは『御談義』の持つ特殊性とでも言えようか。

第四に、註解は、単に平易さにとどまらず、実に多種多様である。とりわけ『河海抄』には見られない独自の註解や連歌上の用語が見られる一方、『河海抄』の「秘説」として集成された『珊瑚秘抄』の註解にまで講釈が及んでいることである。こうした多彩な内容が幅広く講釈され、聞書されたのは、講釈という自由な場がそれを可能にしたのであって、善成自身が「講読の席」で自在に語っていたことを想像させる。

第五に、同時に『御談義』のこうした多彩な内容は、『河海抄』（貞治初年以降成立か）が成稿本として成立した以後も、註解の再検討・改稿・増補が進められ、講釈の始まった至徳三年にあっても新しい註解が披瀝されていたことを物語るものである。

第六に、『花鳥余情』の影響が見られることである。倉野本『源氏御談義』には『花鳥余情』の影響が明確に指摘できるものが一四箇所あり、これは倉野本の書写の段階で入ったと考えるほかに、倉野本が、大まかに言って近世初期に成立したとする有力な証左となっている。

以下、詳細は本編に就いて見て頂くことになるが、調査結果について、特徴的な事項は摘記するほか、重要と思われる事柄や資料の稀少なものには、全データを公開するために、煩瑣な引用にわたること御寛恕願いたい。

なお本書は『千鳥抄（源氏御談義）』とするのが一般的だが、倉野本は外題が「源氏物語御談義」、内題を「源氏御談義」とするので、以後『源氏御談義（千鳥抄）』と呼称する。

注

(1) 跋文（翻刻）は次の通り。

むかし四辻の儀同三司光源氏の物語講読の席をひらかれて／至徳三年の秋より嘉慶二年の冬にいたるまで五十四帖の秘儀をのへさせ給しに相助その末座につらなりて一日といへともおこたる事なかりき後に又おほつかなきふし／をたつね／たてまつりてしるしおける双紙の二帖ありなつてちとり／といふ三十餘年身をはなたすして九十一歳の齢にをよへり／まほろしの世のはかなきをみつ／夢のうき橋か、るうき／身をのこせり一たひ、らきみては懐古のなみたを数行の／字にそ、き二たひ思めぐらしては妄執の罪を多劫の報に／おそる今これを匠作尊闇の座下に奉りおきて世をかさ（55才）／ねたる覆蔭の高恩にむくひたてまつるとひ老のなみ／この世中にたちわかるともはまちとりのあと後にと、ま／らは又なにはのうらみをか此道にのこさむや干時應永廿／六年季春下澣これをしるす（55ウ）

(2) 近くは片桐洋一氏「当座の聞書と聞書の当座性―『源氏物語千鳥抄』新攷―」（岩波書店『文学』一九八二年十一月）。吉森佳奈子氏「『千鳥抄』の位置」（『むらさき』三三三輯 平成八年十二月）がある。

倉野本『源氏御談義（千鳥抄）』凡例

- 一 本書は倉野憲司氏旧蔵『源氏物語御談義』（内題「源氏御談義」、通称「倉野本千鳥抄」、本書では倉野本『御談義』と略称し、簡潔に倉野本あるいは『御談義』と称する場合もある）の影印篇と該書の様相を明らかにした解題篇とからなる。
- 一 該書には、後世の旧蔵者の手になる五枚の貼紙（15才・20才・58才・61才・63才）があるが、影印篇ではすべて除いた。但し引き剥がし不能な次の三箇所は原状のままである。なお三箇所とも貼紙の下には何の記載もない。
- 15才（二顆の蔵印のみ）。58才「非人桑門明静シヤツ」の直後の「定家卿也」が貼紙。
- 63才「兼載」の上「連歌の…」という二行の貼紙。
- 一 解題篇は、倉野本『御談義』の内部の様相及び註解の特質を考察したものである。なお奥書・跋文等の貼付部については一切言及していないが、これについては別途考察を必要とする。
- 一 解題篇における原本並びに諸資料の引用にあたっては、原文を忠実に模したが、次の処理を行った。
- 細字はへく、「」は割註、一部略したところは、…で示した。『河海抄』の「」はもとのまま。
- 引用に当たり見出し項目の頭に典拠とした諸本の略称を掲げた。

〔倉〕 倉野本

〔天〕 天理本

〔河〕〔角〕 角川版『河海抄』

〔籠〕 阪本龍門文庫蔵『河海抄』

〔珊〕 珊瑚秘抄

〔花〕 花鳥余情

- 異体字は通用字に直し、▼を傍記した。また挙例中の傍線部はすべて編者による。
- 特記すべき個所については、*を付して解説を加えた。本文・引用中の太字も編者による。
- 一 考察にあたっては、次のものを基本的資料として用いた。

池田亀鑑『源氏物語大成』全八巻（昭和五三年 九版）中央公論社

玉上琢彌編山本利達・石田穰二校訂『紫明抄河海抄』昭和四三年 角川書店

片桐洋一解題「源氏物語千鳥抄」（『天理圖書館善本叢書叢書部』第五八巻和歌物語古註續集）所収）昭和五七年

八木書店

松尾 聰解題「学習院大学蔵『珊瑚秘抄』（影印）」昭和五三年『源氏物語とその影響 研究と資料—古代文学論

叢』第六輯所収 武蔵野書院

『増補国語国文学研究史大成』3「源氏物語 上」昭和五二年 三省堂

伊井春樹編『松永本花鳥余情』（『源氏物語古註集成』第1巻）昭和五三年 桜楓社

中田武司編『岷江入楚』1～5（同右 第11～15巻）昭和五五～五九年 桜楓社

古田東朔・松田修「源氏御談義（千鳥抄）」『文藝と思想』16号（昭和三十三年十月）・20号（同三十五年十二月）福岡

女子大学

阪本龍門文庫蔵『河海抄』（阪本龍門文庫善本電子画像）

「阪本龍門文庫善本電子画像」が公開している書誌は次の通り。

南北朝時代の四辻善成（よつつじ・よしなり、一三二六～一四〇二）の『源氏物語』の註釈書。

二〇巻。二〇冊。縦28・0 cm×横21・0 cm。楮紙、袋綴じ。川瀬一馬氏は、巻三、四は補筆だが、全体

として室町初期の写とする。

第二〇巻末に散位基重が永和二年（一三七六）十一月から五年（一三七九）三月まで、四辻家から借りだして書写したという元奥書を持つ、いわゆる「中書本（成稿本以前の形態のもの）」系統の古写本。

なお現在、公刊されている『源氏御談義（千鳥抄）』の本文には前掲書等のほか、次のものがある。

『統群書類従』第一八輯下 巻第五百十六「源氏物語千鳥抄」

黒川本「源氏御談義」（ノートルダム清心女子大学古典叢書）昭和五七年

一 倉野本『御談義』の書誌。

平井相助そうじよ聞書。一冊。近世初期成立か。大本（二八・七×二〇・二糎）。古改装原表紙、稍擦れ。茶無地の表紙に白地無粹の題簽「源氏物語御談義 全」（後筆）を左肩に貼付。内題「源氏御談義」。遊紙一枚の外、本文五四枚、跋文等の添付部九枚の計六三丁から成る。〔倉野蔵書〕という朱の蔵印が1オに有り、これによって倉野憲司氏旧蔵書と分かる。一面一一行。片仮名交じり。各巻名の下に講釈の年月日有り。語句には片仮名の振り仮名、或いは漢字による傍記、しばしば「。」による声点が付されている。巻尾に「干時應永廿六年季春下澣これをしるす」とする平井相助の跋文のほか、「十二ヶ條加三ヶ大事十五ヶ條口傳」、「延徳三年秋九月日槐下乗門藤齋 平井相助新發ホツ俗姓者大内家子也云々」、「河海抄与花鳥餘情相違事」、「自筆青表紙夢浮橋卷奥書臨模之」、「原中最秘抄云 ヤウメイノスケノ事」、「源氏物語青表紙〈定家流〉河内本分別條々」、「兼載」奥書、「龍翔院奥書」、更に「一嗟峨院の御時此物語御談義ありけるに以扇招月之事諸道に尋られけるにいつも無所見後日基長卿仰證書に扇月をまなふと云事有五音相通を以てまなふと可心得とぞ」などが添付部としてある。旧蔵者になる舩入。

なお倉野本『御談義』の伝来等については、巻末の「あとがき」を参照されたい。

第一部 倉野本『源氏御談義』影印篇